SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

2013年度日本学術振興会二国間交流事業共同セミナー「朝鮮通信使と琉球使節団の比較研究」実施報告書

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 袴田, 光康 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007808

2013年度日本学術振興会二国間交流事業共同セミナー

「朝鮮通信使と琉球使節団の比較研究」実施報告書

言語文化学科　　袴田　光康

【はじめに】

去る2013年12月16日（月）から22日（日）までの七日間、延世大学校の許敬震教授を代表者とする韓国研究者チームと共に「朝鮮通信使と琉球使節団の比較研究」と題する共同セミナーを実施した。参加者12名（韓国側８名・日本側４名）は、セミナーの前半に沖縄県那覇市において琉球使節団「江戸のぼり」に関する資料調査を行い、後半は静岡市に舞台を移して、朝鮮通信使で知られる清見寺（清水区）を踏査、次いで静岡大学において、アジア研究センター主催による研究発表会を行った。以下は、この共同セミナーの概要報告である。

【経緯】

ソウルの許教授の研究室でコーヒーを一緒に飲みながら、「静岡の海はきれいでしょうね」と許教授が私に微笑みかけたのは、2012年の秋のことであった。朝鮮通信使の漢詩・筆談を専門に研究されてきた許教授は、静岡大学に赴任して間もない私に静岡市清水区の清見寺がいかに重要な場所であるかを熱く語られた。そんな許先生に、「ぜひ、静岡に来てください」と、気軽に答えた一言から、全てがはじまった。

静岡や清見寺を訪問するのなら、静岡と朝鮮通信使に関連したテーマで共同研究ができないかという話になり、日本学術振興会の二国間交流事業への応募へと急速に話が進展し、更に、申請書類を作成する段階で、清見寺に琉球皇子の墓があることから、「朝鮮通信使と琉球使節の比較」というセミナーの研究テーマが浮上し、急遽、沖縄での調査を盛り込む形で研究計画を立てることとなった。慌ただしく書類を作成して２月に応募、７月に採択決定の通知を受け、共同セミナーの予算として年間120万円が交付された。これを受けて、9月に沖縄県那覇市に赴き、調査予定先の事前調査を行い、次いで10月には韓国側研究代表者となった許教授とソウルで準備会を開いた。それ以後はメール等のやり取りを通じて、共同セミナーに向けての具体的な準備、調整を進めた。

【期間】

2013年12月15日（日）～22日（日）

【場所】

沖縄県那覇市（16日～18日）／静岡県静岡市（19日～21日）

【参加者】

韓国

許（ホ）　敬震（ギョンジン）（延世大学校・教授・研究代表者）
河（ハ）　宇鳳（ウボン）（全北大学校・教授）
晉（シン）　永美（ヨンミ）（鮮文大学校・研究教授）
具（ク）　智賢（チヒョン）（延世大学校・教授）
金（キム）　貞信（ジョンシン）（延世大学校・講師）
朴（パク）　惠珉（ヘミン）（延世大学校・研究員）
曺（チョ）　永心（ヨンシム）（延世大学校・研究員）
卓（タク）　承奎（スンギュ）（延世大学校・研究員）
計８名

日本

袴田光康（静岡大学・准教授・研究代表者）
金（キム）　孝珍（ヒョウチン）（明治大学・講師）
堂野前彰子（明治大学・研究員）
木村淳也（明治大学・研究員）
計４名

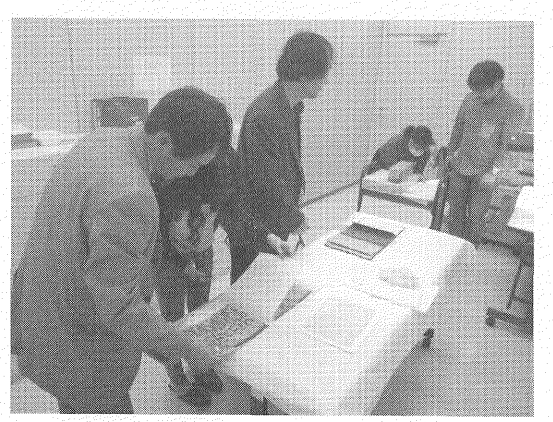
【日程】

12／15（日）
16：00 那覇空港集合（袴田・木村・通訳１名）
17：00 事前準備・打ち合わせ（ホテル内）

12／16（月）
11：50　韓国一行（７名）那覇空港着
12：30　出迎え、ホテルへ移動
13：00　ホテルロイヤルオリオン着
15：30　セミナー開会式・ガイダンス（ホテル内会議室）
18：00　夕食（レセプション）

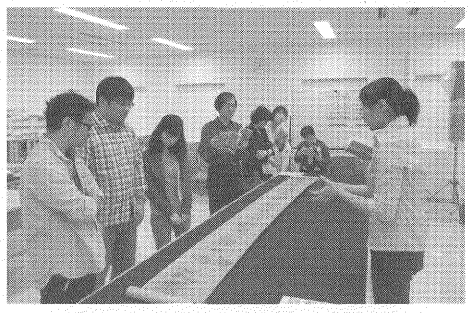
12／16　ﾎﾃﾙﾛｲﾔﾙｵﾘｵﾝ内での開会式

12／17（火）
09：30　ロビー集合
10：00　普天間神社見学
11：00　琉球大学附属図書館
12：30　昼食
14：00　ホテル着
15：00　那覇市歴史博物館見学
17：00　ホテル着
18：30　夕食

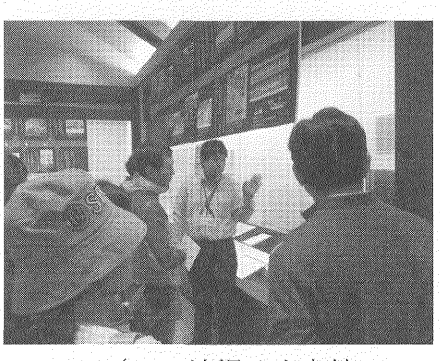


12／17　琉球大学附属図書館

12／18（水）
09：00　ロビー集合
10：00　沖縄県立博物館見学
11：30　昼食（県立博物館で懇談会）
13：00　沖縄公文書館
14：30　首里城見学
18：30　ホテル集合・夕食


12／18　沖縄県立博物館

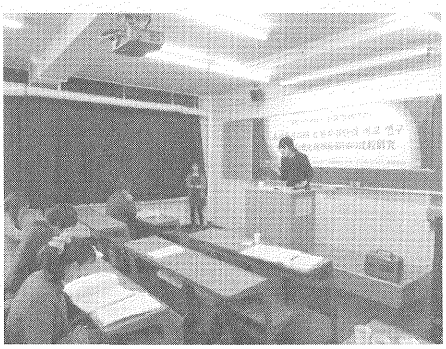
12／19（木）
11：00　チェック・アウト
12：00　那覇空港
13：25　静岡へ移動
15：40　静岡空港着
16：10　静岡駅へ移動
17：15　静岡駅着
17：20　ホテル着（具先生合流）
18：00　夕食


12／18　沖縄公文書館

12／20（金）
09：00　ロビー集合（金孝珍先生合流）
09：30　宝奏寺見学
10：00　久能山東照宮見学
12：00　昼食
13：00　清見寺見学
15：30　朝鮮通信使作篇額調査
17：30　ホテル着
18：00　夕食（レセプション）

12／20　久能山東照宮

12／21（土）
08：30　ロビー集合（堂野前先生合流）
09：00　静岡大学へ移動
10：00　共同セミナー研究発表会開会
（静岡大学共通Ａ棟 306 教室）
※研究発表会については下記【プログラム】参照
17：00　共同セミナー研究発表会閉会
17：15　記念写真撮影
18：00　ホテルへ移動
19：00　夕食


12／21　研究発表会（於静岡大学）

12／22（日）　09：00　チェック・アウト（解散）　10：20　静岡空港着（見送り）

【研究発表会プログラム】

日韓共同セミナー研究発表会プログラム

日時　2013年12月21日（土）10：00～17：00
場所　静岡大学共通A棟306教室
主催　静岡大学人文社会科学部アジア研究センター
　　韓国延世大学校GLOBAL韓国学研究センター
後援　日本学術振興会・韓国研究財団

開会の辞　許敬震

午前の部　司会　袴田光康

10：00－10：30 朴惠珉「うわさと真実の境界―「琉球国世子」物語の形成過程に関する一考察－」
10：30－11：00 木村淳也「箕隅御嶽の由来記を読む―旅の儀礼と伝承の創作―」
11：00－11：30 河宇鳳「朝鮮時代琉球との相互認識」
11：30－11：45　休憩
11：45－12：15 金孝珍「正徳元年朝鮮通信使への饗宴―新井白石と吉宗をめぐって―」
12：15－12：45 曺永心「朝鮮通信使と琉球使節団の筆談（対談）―新井白石を中心に―」
12：45－13：45　昼食（304教室）

午後の部　司会　河宇鳳

13：45－14：15 堂野前彰子「古代文学と東海の道」
14：15－14：45 卓承奎「絵画における朝鮮通信使と琉球使節団の比較」
14：45－15：15 袴田光康「清見寺と最後の朝鮮通信使―静岡県島田市瀧家文書の漢詩について―」
15：15－15：45 晉永美「誠信交隣の表象性と清見寺の梅花」
15：45－16：00　休憩
16：00－16：30 金貞信「1592年壬辰戦争に対する朝鮮と琉球の対応及び儒教的な事大交隣秩序の変動」
16：30－17：00 具智賢「通信使との比較を通じた『琉球聘使記』」
閉会の辞　袴田光康

【成果】

① 資料の収集

琉球大学図書館・沖縄県立博物館・沖縄公文書館においては、琉球使節団に関する貴重な絵画や漢詩文を実見し、デジタル撮影することができた。また、清見寺の調査においても、市文化財課の渡邊康弘氏と清見寺住職のご厚意により、特別に「朝鮮聘使唱和集」、「来觀小華使臣詩集」、「日誌（自宝暦十三年至安永三年）の」三点の撮影が許可された。収録された数多くの画像データをどのような形で今後の研究に反映させていくかは課題であるが、従来の朝鮮通信使の資料を補うものとして期待される。

② 地域への貢献

清見寺での調査においては、朝鮮通信使の専門家である金両基氏（元静岡県立大学教授）が加わり、様々な意見交換がなされた。その一部は、12 月 22 日付けの韓国の「東亜日報」に掲載された（(http://news.donga.com/Main/3/all/20131222/59718711/1)。こうした海外のメディアを通じて清見寺の歴史的価値が紹介されたことは、静岡の地域文化を広く国際的に発信することに寄与するものであった。

東亞日報

2013년 12월 23일 월요일 A23면 문화

日 시즈오카 세이켄지 소장 기록물 등 유네스코 한일 공동등재 추진… 연세대 허경진 교수-재일교포 학자 김양기씨

“생생한 조선통신사 자취, 韓日 평화시대 200년의 값진 유산”

사정단 일행이 체류하며 남긴 시문-현판 등 70점은 지역 문화재

“필담집-외교문서 등과 함께 수교 50년인 2015년 등재 목표 냉각된 한일관계 개선 계기 기대”

일본 시즈오카 시 세이켄지의 본전(本殿) 앞에서 허경진 연세대 교수(왼쪽)와 김양기 전 시즈오카현립대 교수가 이야기를 나누고 있다. 본전 위쪽 중앙의 종(鐘)에 이곳과 관련 있는 일본어 동화가 새겨져 있어 바쁜데도 주변의 도움을 조선통신사가 빠른 것이다. 시즈오카=신창민 기자 sawoong@donga.com

「東亜日報」2013 年 12 月 22 日付記事

③ 研究の相互補完

共同セミナーは全般的に琉球使節団については日本側が、また、朝鮮通信使については韓国側が分担して情報を提供する形となった。相互に補完する形で比較研究がなされたことは、初めての共同セミナーとしては一定の評価に値するものと言える。しかし、研究発表の内容は、セミナーに入る前の段階で各自が準備したものであるため、専門知識の差もあって、必ずしも咬み合っていたとは言えない面もあった。セミナーでの質疑応答を通して、両国の資料を照らし合わせる必要性が再確認され、テーマごとに自国の基本史料や先行研究について前もってリストを作成し、それを相互に交換して情報を共有できる状況を事前に準備することが提案された。国際的な共同研究においては、それぞれの国において研究史や研究スタイルが異なる一方、参加者が必ずしもその専門分野に携わってきたとは限らないという事情もある。その意味でも、学術情報の共有という環境作りは重要である。

④ 発展課題の提起

今回のセミナーを通じて、韓国側研究者が琉球の文化について大きな関心を持っていることが判明した。琉球の説話文学については、韓国ではまだ十分に紹介がされておらず、今後も共同で研究を進めていきたいという意向が示された。なお、今回の共同セミナーの研究発表会における発表のうち、琉球と朝鮮の比較を対象にしたものは、韓国で出版予定の「琉球文化研究叢書：説話・漂流・使行」全 3 券に収録される予定である。

また、朝鮮通信使や琉球使節団のような公式な外交だけでなく、非公式な民間の交流にも目を

向けるべきであるという認識で一致を見た。具体的な研究対象として浮かんだのは、「漂流」というテーマである。近世には、読み物と書かれたものも含め、多くの「漂流記」が編まれている。加えて、古代から近世まで、「漂流」というテーマで通史的に見通すことによって、そこに通底している異国観や自国意識の問題もより明確になっていくことが期待される。このように次のステップに向けての更なる共同研究の基盤が作られたことも今回のセミナーの成果の一つであった。

12／21　研究発表会

【展望】

本共同セミナーは、開催地を２か所、開催期間を１週間とするものであった。これは、二国間交流事業の共同セミナーの中でも異例に属するものである。通常は、発表を中心した２・３日間の共同セミナーが開かれることが多い。今回は、沖縄の調査を含めたこと、また若手の研究者が多かったことなどから、その倍の時間を日韓の研究者たちは共に過ごすことが可能になった。この間、専門分野における情報は無論のこと、それぞれの国の研究動向や最新の学界情勢についても情報交換をすることができ、七日間のセミナーは極めて有意義な時間であった。無論、セミナーの期間が長くなれば、そのための準備もたいへんになるが、準備期間も含め、相手国のパートナーとの人間的な交流を深めること、そして相互の信頼関係を築くことが、国際的な共同研究にとって重要であることを痛感した。

共同研究は、学術的な相互発展を目指したものであるが、人が営むものである以上、その根本にあるのは人と人の結びつきである。各大学や研究機関においては、「東アジア」を冠する共同研究や国際研究が非常に多いが、中国・韓国に対する外交関係の悪化が長引く中で、その枠組みをどうように維持し、発展させていくことができるのか。直面している問題は極めて深刻である。組織の枠組みを超えた、より人間的な関係が持続力として問われることになるかもしれない。

最後に、本共同セミナーの開催にあたり、アジア研究センター、国際協力課、契約課などの関係機関に御尽力いただいことに感謝の念を表すと共に、引き続き今回の共同セミナーを発展させる形で2014年度二国間交流事業に二年間の共同研究を新たに申請したことを申し添えておきたい。